

(2) 月間平均値の経月変化

平成24年度の全炭化水素の有効測定局における月間平均値の総平均の変化は図1-8-2のとおりであり、冬期に濃度が上昇する傾向にある。

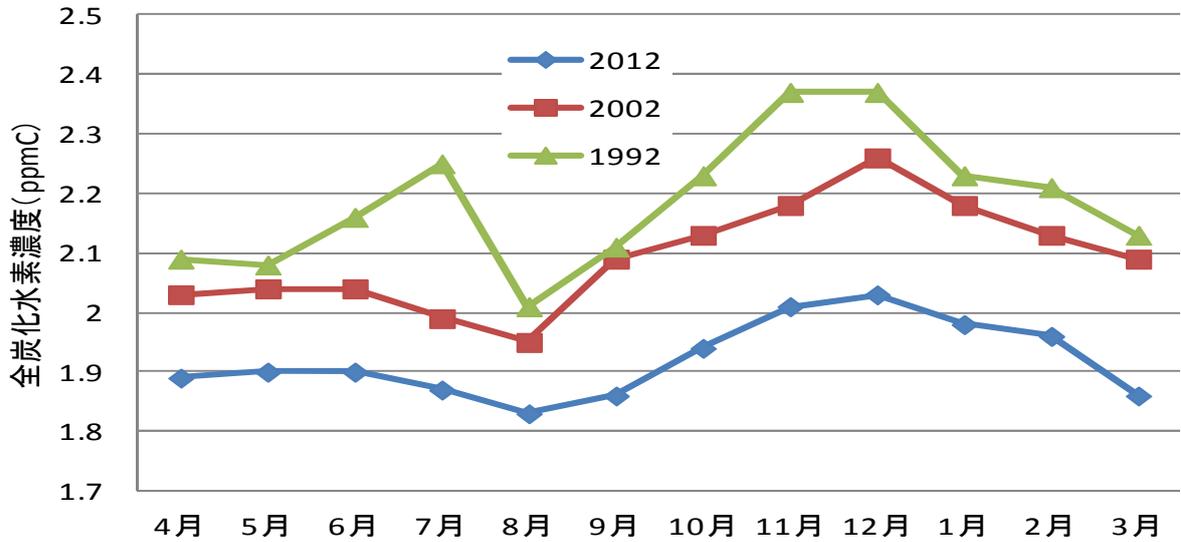


図1-8-2 全炭化水素の月間平均値の経月変化（一般局）

(3) 年平均値の経年変化

全炭化水素については昭和53年度から測定を実施している。

一般環境大気中の全炭化水素の濃度は、図1-8-3のとおり年度変動は小さいが、平成10年度頃からごくわずかであるが低下傾向が見うけられる。

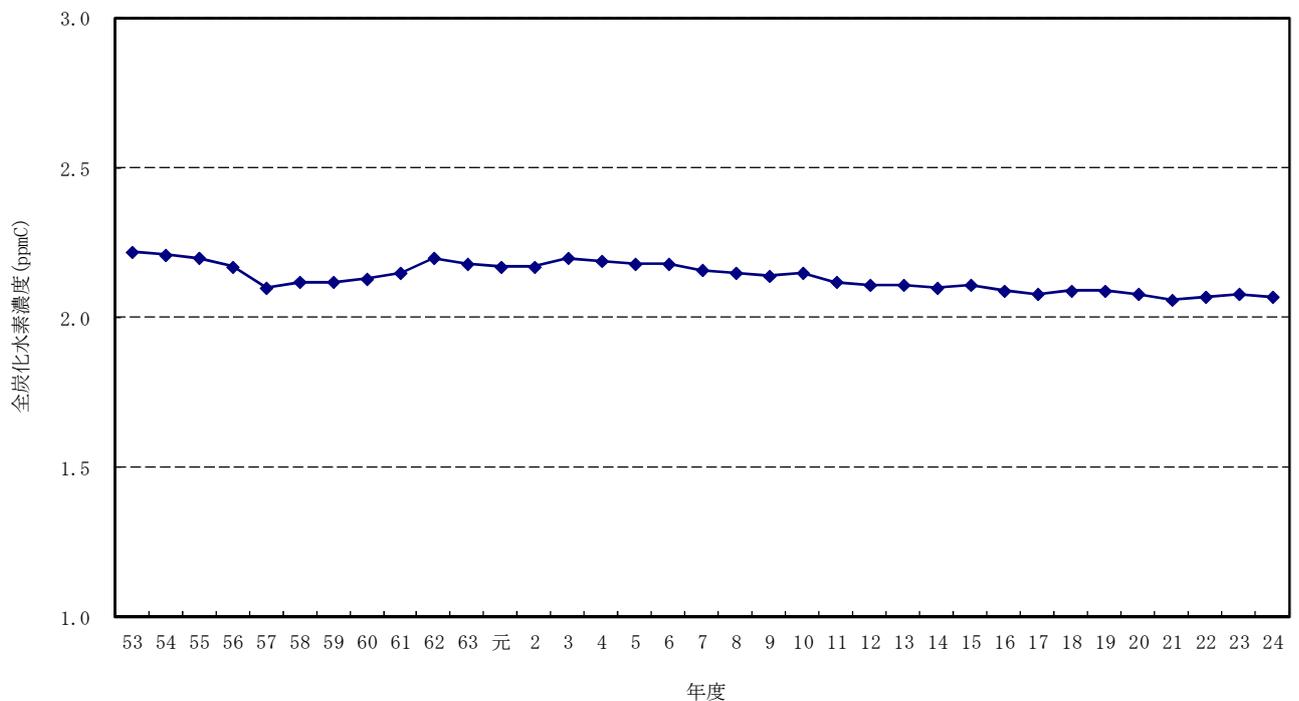


図1-8-3 全炭化水素の経年変化（一般局）
 (注) 有効測定局の年平均値の総平均値で評価

2-2 自動車排出ガス測定局

(1) 測定結果（年平均値）

平成24年度の全測定局の測定結果は年平均値で1.99~2.18ppmCの範囲にあり、各測定局の年平均値の総平均値は2.06ppmCと一般環境大気と同程度である。

(2) 年平均値の経年変化

道路沿道周辺大気的全炭化水素については昭和53年度から測定を実施している。

道路沿道周辺大気的全炭化水素の濃度は、図1-8-4のとおり50年代半ばと比較すると低下しており、近年では概ね2.1ppmCとなっている。

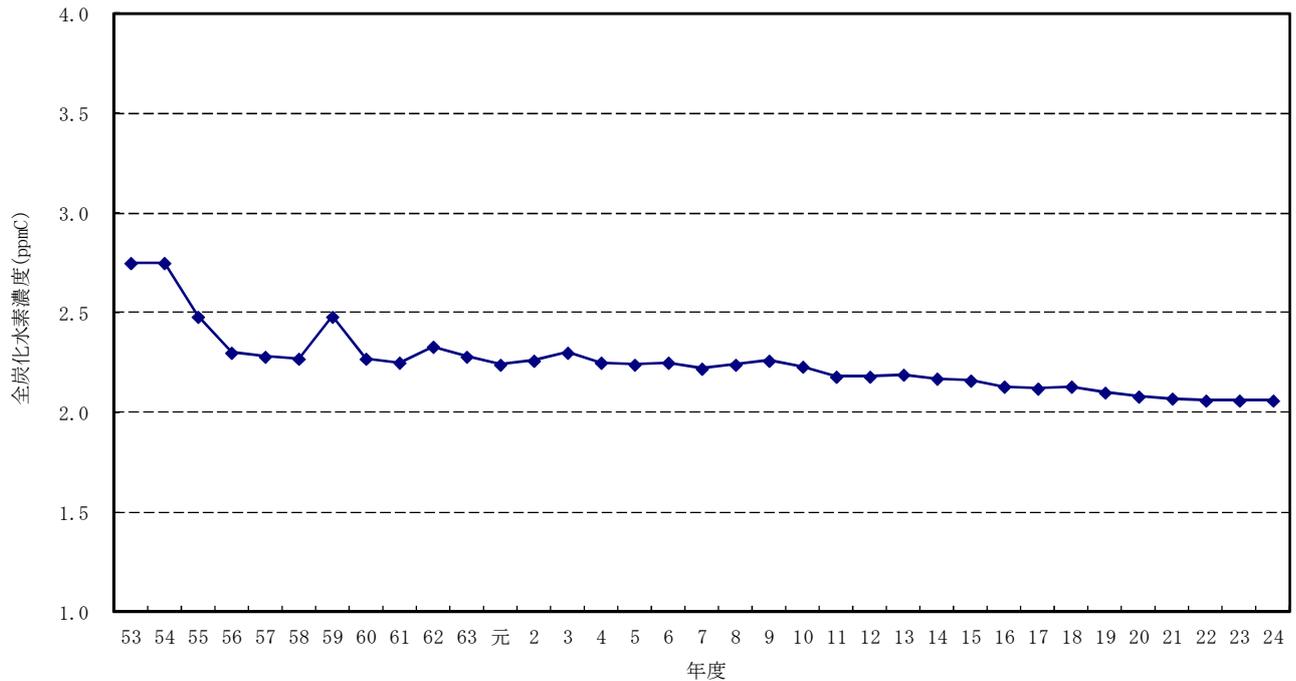


図1-8-4 全炭化水素の経年変化（自排局）
(注) 有効測定局の年平均値の総平均値で評価

3 非メタン炭化水素(NMHC)

3-1 一般環境大気測定局

(1) 測定結果(年平均値)

平成24年度の有効測定局40局の測定結果は年平均値で0.04~0.26ppmCの範囲にあり、各測定局の年平均値の総平均値は、0.13ppmCである。

また、各測定局で得られた年平均値の分布状況は、図1-8-5及び図1-8-6のとおり野田、東葛地域で高い傾向が見られる。

なお、炭化水素については、環境基準は定められていないが、昭和51年8月に中央公害対策審議会から、「炭化水素の測定については非メタン炭化水素を測定することとし、光化学オキシダントの生成防止のための濃度レベルは、午前6時から9時の3時間平均値が0.20~0.31ppmCの範囲にあること」との指針が示されている。

24年度の測定結果についてみると、午前6時から9時の3時間平均値の最高値は、0.31~1.27ppmCの範囲にあり、40局のうち39局で「指針」の上限値0.31ppmCを超えている。

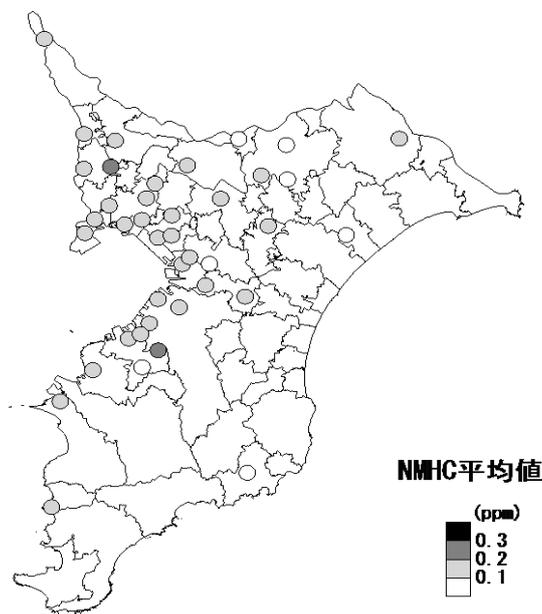


図1-8-5 非メタン炭化水素濃度分布(一般局, 年平均値)

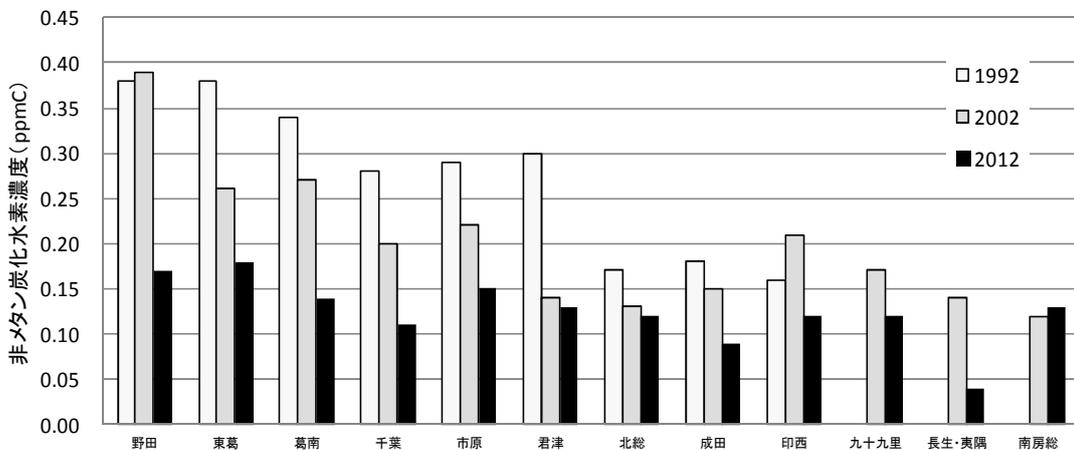


図1-8-6 非メタン炭化水素の地域別濃度の推移(一般局・年平均)

(2) 月間平均値の経月変化

平成24年度の全測定局（有効測定局）における非メタン炭化水素の月間平均値の変化は図1-8-7のとおりであり、いずれも冬期に濃度が上昇する傾向がある。

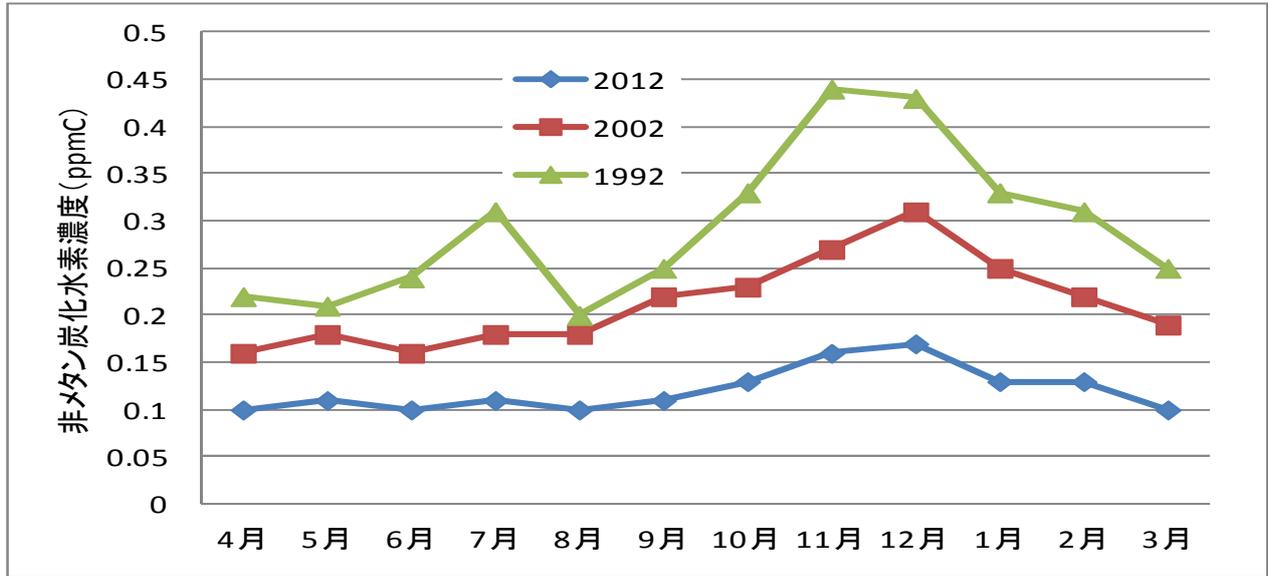


図1-8-7 非メタン炭化水素の月間平均値の経月変化 (一般局)

(3) 年平均値の経年変化

非メタン炭化水素については全炭化水素と同様に昭和53年度から測定を実施している。

一般環境大気中の非メタン炭化水素の濃度は図1-8-8のとおり50年代前半と比較すると低下しており、近年は0.20ppmC以下で推移している。

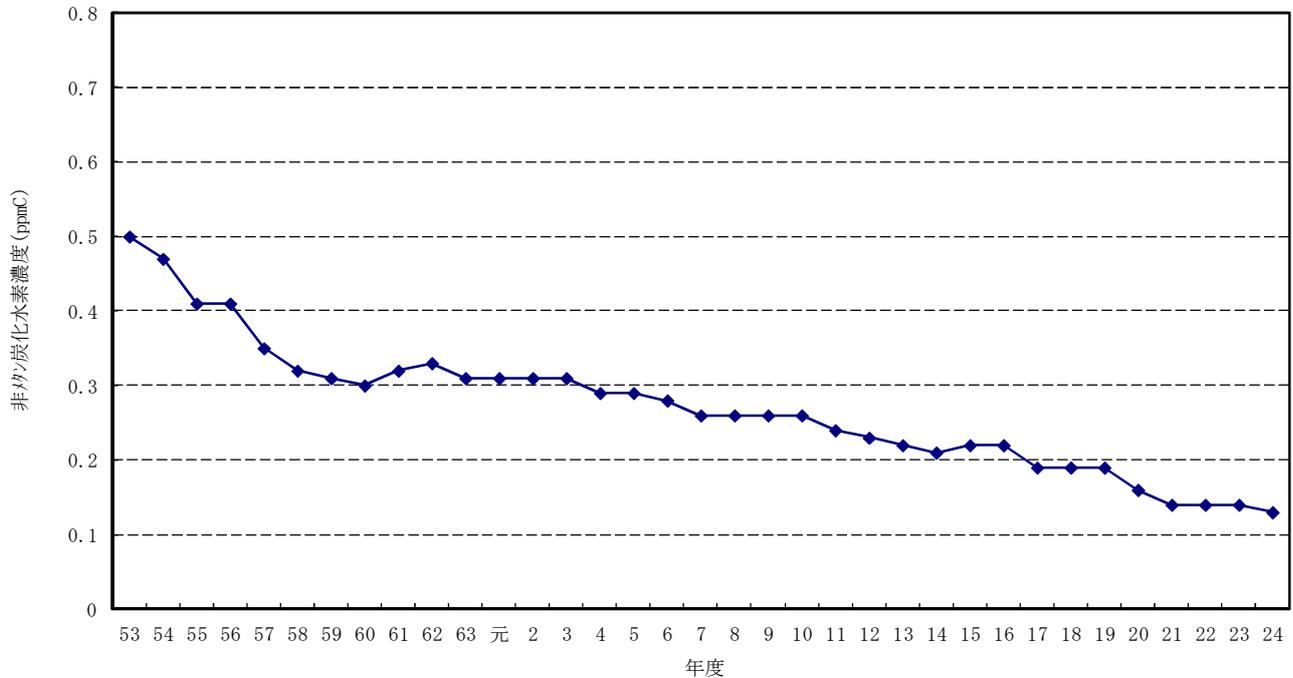


図1-8-8 非メタン炭化水素の経年変化 (一般局)

(注) 有効測定局の年平均値の総平均値で評価

3-2 自動車排出ガス測定局

(1) 測定結果 (年平均値)

平成24年度の全有効測定局13局の測定結果は年平均値で0.08~0.24ppmCの範囲にあり、各測定局の年平均値の総平均値は0.15ppmCと一般環境大気と比較すると約1.2倍程度の濃度となっている。

24年度の測定結果についてみると、午前6時から9時の3時間平均値の最高値は、0.48~0.93ppmCの範囲にあり、全有効測定局で「指針」の上限値0.31ppmCを超えている。

(2) 年平均値の経年変化

道路沿道周辺大気の新メタン炭化水素については昭和53年度から測定を実施している。

道路沿道周辺大気の新メタン炭化水素の濃度は、図1-8-9のとおり50年代前半には年平均値で0.90ppmCを上回る年度もあったが、低下傾向にあり、近年は概ね0.20ppmC程度で推移している。

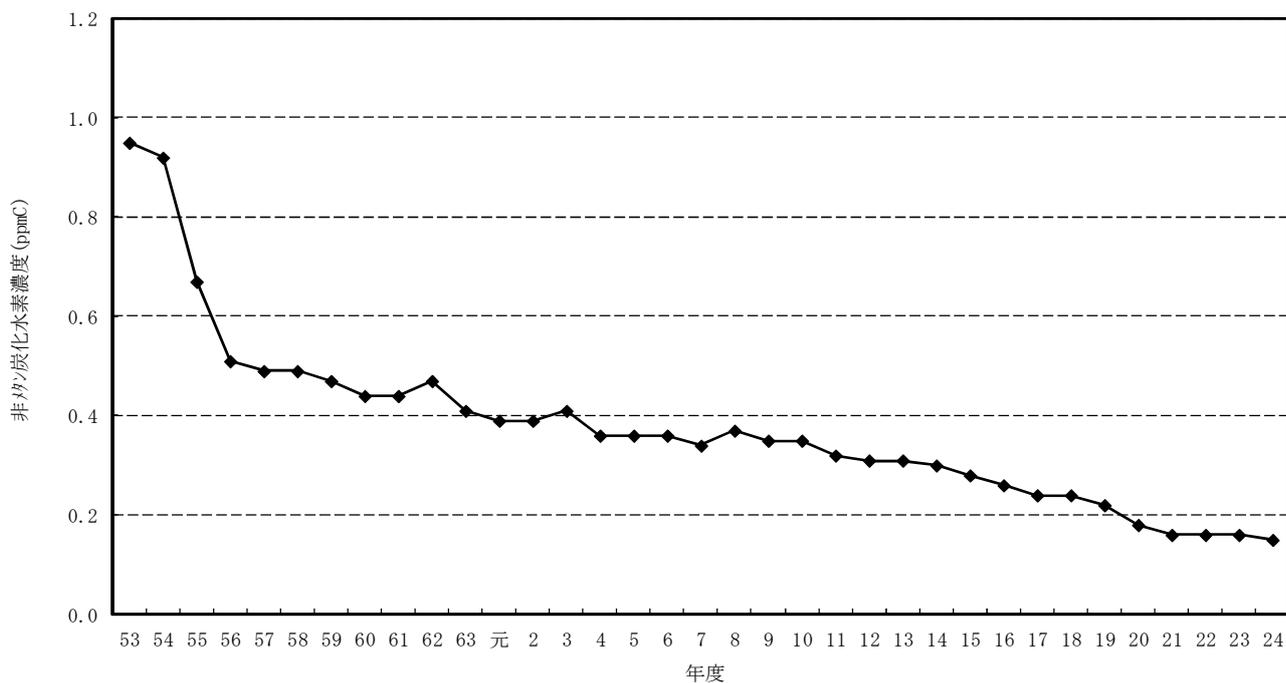


図1-8-9 非メタン炭化水素の経年変化 (自排局)

(注) 有効測定局の年平均値の総平均値で評価